

ラクトヒロックスの具体的使用事例 小豆-1

作 物	大納言小豆
効 果	① ムギ後に播種したが、播種前にムギの残渣がきれいに分解され、小豆の生育に悪影響を及ぼさなかった。 ② 排水性が良くなったので、7月と8月の豪雨で2度冠水したが、大きな被害は出なかった。
事例年	2021年

福井市の浄土寺農業生産組合(代表：佐野 弘)では、2年前から転作のムギの後に丹波大納言小豆を栽培している。今年は2.6ha栽培した。

過去2年の栽培結果を考察すると、麦の残渣が長く地中に残っていて小豆の根張りなどに悪影響を与えている、播種後大雨が降ると水はけの悪い場所の小豆は生育が非常に悪くなるといった問題点があった。

そこで今年は、ムギ残渣の早期分解と排水性を良くするために、ラクトヒロックスを施用することにした。麦刈りの後の6月6日にラクトヒロックス(400g/10a)を尿素(8kg/10a)に混ぜて散布して耕し、約50日後の7月23日に播種した。播種する時点でムギの残渣は殆ど分解されていた。その数日後、発芽時期の7月28日の豪雨で冠水したが、無事発芽した。このまま順調に生育してくれる事を期待していたが、8月13日の豪雨で2度目の冠水をしてしまった。そのため、今年は全滅になるかと心配された。しかし、何とか持ち直して生育し、11月18日に刈り取った。収量は残念ながら昨年の約2割減になってしまった。品質は昨年並みであった。

佐野代表は「もしかすると2度の冠水で、全滅に近い被害が発生したかもしれなかった。この程度の被害で済んで本当に良かった。ラクトヒロックスの施用で排水性が向上した事と、麦の残渣を短期間で分解できたためと考えられる。今後も生産量を増やし、地域の特産品にしたい」と話していた。

■ムギ刈後のラクトヒロックス（粒剤）散布風景（2021-06-06）



ラクトヒロックスを尿素に混ぜ、動力散粉機で散布

■播種後の豪雨による冠水（2021-07-29）



播種5日後に豪雨に見舞われ冠水した

■大納言小豆刈取（2021-11-18）



■収穫した大納言小豆（2021-11-18）

